

『今月の天候と農作業』

通巻第5546号
8月号
平成24年8月3日発行
宮崎県
宮崎地方气象台



【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	30	30	40
日照時間	九州南部	40	30	30

【概要】

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は平年並または高い確率ともに40%です。

〈1週目の予報〉 8月4日(土)～8月10日(金)

天気は、台風第11号や湿った気流の影響で曇りや雨となるでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、平年並の確率50%です。

〈2週目の予報〉 8月11日(土)～8月17日(金)

天気は、湿った気流の影響で雲の広がる日がありますが、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

〈3週目から4週目の予報〉 8月18日(土)～8月31日(金)

天気は、平年と同様に高気圧に覆われて晴れの日が多いでしょう。

普通作物

稲作

◆普通期水稻

今月は出穂時期となり、防除や施肥など重要な管理が多くなります。各種情報に基づき、適期適切な管理で出穂を迎えましょう。

1 水管理

幼穂の伸長期ですが、根の健全化を図るため間断かん水を行います。ただし穂ばらみ期から出穂開花期にかけての水不足は、穂の発育に悪影響が出ますので湛水状態とします。台風襲来時は深水管理とし、台風通過後も吹返しの乾燥風による生育障害が発生することがあるので、急な落水は控えましょう。

2 追肥

ヒノヒカリでは出穂前15～20日頃で幼穂の長さが1 $\frac{1}{2}$ 程度に、葉色に合わせて適量の穂肥を行います。なお、田植え時に一発型の肥料を用いた圃場では施用する必要はありません。

3 病害虫防除

現在セジロウンカが大発生しており、今後はトビイロウンカが急激に増殖します。次の防除適期の幼虫期間は盆頃から下旬にかけてになりますが、地域ごとの情報を確認して、しっかり防除を行いその後も観察に努めましょう。

穂いもちの発生は大きく減収するので、出穂前後に必ず防除します。特に中山間地や常発地では、防除時期を逃さないよう注意します。

カメムシによる斑点米は等級格下げの原因になります。防除は穂揃い期とその10日後の2回は行います。カメムシの密度低下のため、畦畔や水田周囲の草刈りも効果的です。出穂の2週間程前迄に終わらせます。出穂直前に草刈りを行うと、逆にカメムシを水田に追い込むことになるので注意します。防除の際は周辺作物に飛散させない等、注意しましょう。

◆大豆

1 中耕、培土

長雨や台風の影響で、生育もやや遅れ気味です。雑草対策や地力窒素の発現を促すため、中耕、培土を2回行います。第1回目は、本葉三葉期に第一節の位置まで、第2回目は、本葉五葉期に第三節の位置まで行います。培土は開花期までに終わります。

2 排水対策

大豆は湿害に弱いので、大雨による冠水や滞水を避けるため額縁排水など

の排水対策を実施します。

3 病害虫防除

ハスモンヨトウの発生時期になります。薬剤は若齢幼虫時の防除が効果が高いので、圃場観察に努め、食害による白い斑葉の発生を確認したら直ちに防除します。

◆そば

1 ほ場の選定

そばは、湿害に弱い作物ですので、排水の良いほ場を選び額縁排水などの排水対策を行います。

2 播種

播種時期は、山間地域は8月上旬～中旬、西北諸県地域は8月下旬、沿海地域は8月下旬～9月上旬です。

10㎡当たりの播種量は、条播が6kg、散播では10kg程度です。

施肥は、量は窒素成分で10㎡当たり2.5kgです。

(鎌田 博人)

施設野菜

8月は施設野菜の育苗開始時期となります。この時期の高温は、果菜類では雌花の着生や発達に大きな影響を与えますので、温度管理に注意が必要です。

育苗ハウスは、害虫の侵入防止対策として防虫ネットが設置してあるものがほとんどですが、ハウス内の温度が高くなる傾向にありますので、遮光資材を利用し昼間の温度上昇を防ぐことが大切です。遮光資材は、遮光率の低いものを日中の高温時に使用し、曇雨天日や朝夕は光が当たるようにすることが必要です。

◆きゅうり

露地抑制・ハウス抑制栽培の育苗期にあたります。高温期の育苗のため、茎葉の生育が早く、地上部に対して根量が少ない場合が多く、定植後の活着不良等が懸念されますので、健苗育成のためにはハウス内の温度を下げ、こまめにかん水を行うことが必要となります。

また、この時期はアブラムシやミナミキイロアザミウマが媒介するウイルスによって発生するモザイク病（CMV等）や黄化えそ病（MYSV）の発生に注意が必要となります。防虫ネットにより媒介昆虫の侵入を防ぐとともに、定期的に薬剤防除を行いますが、ウイルスの伝染源となる庭先での自家用のきゅうり、

かぼちゃなどの栽培を控えるとともにハウス周辺の除草の徹底が重要となります。

◆ピーマン

セル苗など若苗で定植する場合には、初期生育が旺盛になるため、基肥を減肥したり、活着後のかん水を控える等、草勢を調整する必要があります。

鉢上げを行い二次育苗する場合には、生育が進むのに伴い、蒸散も盛んになるので、日中乾燥しないようかん水を適宜行ないます。しかし、夜間多湿になると徒長や疫病発生の原因になるので、夕方のかん水や多かん水は避けます。さらに、生育が進むと葉が重なり徒長するので3回程度鉢ずらしを行い、がっちりした苗に仕上げます。また、CMVによるモザイク病の発生が懸念されますので、きゅうりと同様の対策を徹底します。

◆トマト

ミニトマトの早い作型では、下旬よりセル苗を利用したダイレクト定植が始まりますが、初期生育が旺盛となり異常茎（めがね）が発生しやすくなりますので、基肥を減肥したり、活着後のかん水を控えるなど、草勢を調整する必要があります。また、黄化葉巻病（TYLCV）の発生への注意が必要となりますので、媒介虫であるコナジラミ類の防除の徹底が必要となります。

◆いちご

株の生育に伴う蒸散量の増加や高温により、鉢が乾燥しやすくなるため、午前中を基本に十分なかん水を行います。また、水のかかりの悪いところは手かん水を行うなどこまめな管理が必要となります。追肥は、緩効性の粒状肥料等を置き肥する場合は、中旬までに終わらせますが、極端な肥料切れは苗質に大きく影響しますので、苗の生育状況に応じた、液肥や葉面散布等による施肥管理が必要となります。

(郡司 孝幸)

葉茎根菜類・いも類

◆秋冬野菜の土づくり

8月は秋冬野菜の植付けにむけて土づくりを行う時期です。収量・品質を高めるには、深耕による物理性の改善、土壌pHの調整による化学性の改善、堆肥等の有機質資材の投入による生物性の改善と3つの視点で土づくりを行う事が重要です。深耕は作土層の拡大や排水性の向上をねらいに、pHは分析にもとづく石灰資材の施用、堆肥は完熟したものを用います。

◆加工にんじん

播種時期となります。高台地帯では8月上旬、沿海地帯では中旬～下旬が播種の適期となりますが、にんじんは一齐に発芽させることが重要なポイントとなり、土壌が乾燥又は過湿の状態では、発芽率が低下しますので、かん水施設のあるほ場では播種前後に適度にかん水し、施設のないほ場では降雨により適度の土壌水分が確保できる状態で播種しましょう。

◆食用かんしょ

4月に植え付けたかんしょの収穫期です。生育日数が130日以上になると、いもの形や皮色が悪くなりますので、今月末までには収穫を終えましょう。普通堀では秋にかけて鱗翅目幼虫（ハスモンヨトウ、ナカジロシタバ等）が多発しやすいので、薬剤防除を行います。

◆さといも

マルチ栽培の石川さといもは収穫を遅らせると水晶芋や割れ芋等が発生し品質が低下しますので盆までには収穫を終えましょう。

中生種では8月の土壌水分量が収量・品質に大きく影響しますので、かん水が可能なほ場では、スプリンクラーの利用や通路かん水などを行ってください。また、今月から来月にかけてはヨトウムシ類が発生します。若齢幼虫期に防除を徹底しましょう。

◆キャベツ・はくさい

年末～年明けに出荷する作型の播種時期となります。苗床として、サイドに防虫ネットを張ったハウスを準備し、120～150穴セルトレイで育苗します。25日前後で定植期に達しますので、本圃の準備が遅れないようにしましょう。

(河野 健次郎)

果樹

1 常緑果樹

◆温州みかん

今年の温州みかんは、結果量の多い園地が多く見られます。Mサイズの果実横径は8月10日の時点で50から56^{ミリ}が理想です。肥大が遅れている樹については、さらに摘果を行いましょ。

◆完熟きんかん

今年は、新芽の充実遅れにより、開花が平年よりも遅れ、結果時期もやや

遅くなっています。結果の遅れた園地では、初期肥大の確保と早期摘果が特に重要なポイントとなります。結果確認後の施肥と灌水を十分に行いましょう。また、8月下旬からは、傷果を中心とした荒摘果を開始しましょう。

◆日向夏

この時期から日焼け果が発生してきますので、ダニ防除を実施し、袋掛けを行って、良品確保に努めましょう。

◆マンゴー

今年は7月の日照不足により、剪定後の枝の発生と緑化が遅れています。緑化の遅れは、花芽分化や結果に悪影響を及ぼします。緑化が遅れている園地では、葉面散布や新梢の間引きで葉に光が当たりやすくすることで、新梢の早期緑化を図りましょう。

2 落葉果樹

◆ぶどう

収穫終了後の早期落葉は、貯蔵養分の減少とともに、翌年の作柄にも影響を及ぼします。べと病等の防除を徹底し、早期落葉を防止しましょう。

◆クリ

今月から収穫が始まります。毎日収穫し、特に温度の低い朝の時間帯に収穫することで、病虫害果や腐敗果を減らすことができ、その後の品質も良好になります。

3 台風対策

防風施設は、果実への被害を軽減させます。防風ネットの点検を実施しましょう。

また、長時間の冠水は病気の発生を助長します。排水溝の整備を行いましょう。

幼木や高接ぎ樹の誘引・結束も確認しましょう。

台風通過後は、折損部の保護や倒伏樹の引き起こしと根締めを行いましょう。

かんきつ類のかいよう病対策などで行う薬剤散布は、枝葉や果実に付着した薬剤が台風の雨によって表面に広がることで、病原菌などの発芽や伸長を抑制し、防除効果を発揮します。防除は、台風襲来前に実施しましょう。

海岸近くで塩害の恐れがある時は、直ちに散水して塩分を洗い落としましょう。

4 果樹全般

◆除草

夏の下草は、樹体との養水分の競合や病害虫の温床となるので、草刈りを行いましょ。刈った草で土壌表面を被うことで、土壌の乾燥防止による細根の発生促進や、土壌浸食の防止につながります。除草剤と草刈りを上手に組み合わせ作業を行いましょ。

(山口和典)

花き

◆夏秋ギク

強い日照により成長点付近の葉焼けが懸念されますので、遮光や換気、葉面散布剤の散布等の対策を実施して下さい。「フローラル優香」の9～10月出荷の奇形花（貫生花）は再電照の開始時期に影響されますので、適期である総苞形成前期（3期）から再電照を開始して下さい。

◆秋ギク

各作型の作業計画に応じて、育苗、冷蔵、定植などの作業を進めて下さい。冷蔵は穂・苗の貯蔵・確保と成長促進のために2～4℃で実施しますが、冷蔵期間が長期になると穂の傷みが多くなります。さらに、「神馬」系統の品種は開花遅延も懸念されますので、冷蔵は3週間までにしてください。「神馬66-4」については、従来の「神馬」と比較してやや早生系統ですので、11月作型の電照開始は早めに実施しましょ。

◆ホオズキ

最も暑い時期の出荷になりますので、収穫後速やかに水につけるとともに、結束時に水切りを実施し、十分な水揚げを行いましょ。ホオズキは系統により着果や実の形・「シミ果」の発生程度等が異なります。また、ウイルス性の病害も増加していますので、本年の栽培株で着果や品質の良い株があったら印を付けその地下茎を確保し、翌年は区別して栽培して下さい。出荷終了後は、土壌伝染性のウイルス対策として残渣の腐熟処理を徹底して実施しましょ。

◆スイートピー

品種と植え付け予定日にあわせて催芽処理・種子冷蔵を行います。種子はできるだけ充実した大きいサイズのものを選びます。吸水中に酸素不足を防止するため吸水処理は流水中で行って下さい。処理には定植数より多めの種子

を準備し、未発芽種子は取り除いて冷蔵を行います。冷蔵中は庫内温度や水分を定期的に点検して下さい。中山間地域の一部では植え付けが始まりますが、遮光等の高温対策は十分に行ってください。

◆シキミ

気温が高くダニ類の被害が多い季節になります。定期的な防除で良品生産に努めて下さい。最も需要のある時期ですが、高温期でバクテリアが繁殖しやすいので清潔な水で水揚げを行い、出荷先で事故品が出ないように気をつけましょう。また、黒シミ斑点病については、今月も引き続き防除を徹底し、感染防止に努めましょう。

◆デルフィニウム

育苗中は、定植時に本葉10枚前後に達するのを目標にかん水、施肥を行って下さい。中山間地では定植が始まります。早期抽だいを抑えるためにハウス内は換気や遮光をおこない、できるだけ気温の上昇を防ぎましょう。定植から抽だいまでは株が充実するように十分にかん水して下さい。また、チビクロバナキノコバエとうどんこ病等の病害虫を本ほに持ち込まないように定植前に防除するとともに、ほ場での発生に注意してください。

◆トルコギキョウ

平坦地では種子冷蔵終了後の夜冷育苗が始まります。発芽後は定期的に追肥を行い、苗の充実を図ります。育苗中の高温や乾燥で低温の効果が失われますので、日中は十分な換気を行うとともに、適切なかん水管理に努めて下さい。中山間地では出荷が続きます。早めの摘蕾、摘芽に心がけ、品質向上につなげましょう。

◆台風対策

特に被害の出やすい露地・雨よけ栽培は、排水溝を整備し、冠水をしないようにするとともに、防風ネットを設置し、茎葉の損傷や倒伏を防ぎましょう。

シキミ等の花木類の幼木は、倒れないように支柱等でしっかりと固定しましょう。倒伏した場合は、台風通過後に樹を段階的に引き起こして、正常な状態に戻しましょう。

また、茎や葉の損傷が発生した場合は、薬剤防除や液肥の葉面散布を行い、草勢等の回復を図りましょう。

(中村 広)

畜産

◆家畜

今夏は電力需給も逼迫するため、仮に計画停電が実行された場合を想定して、あらかじめできる限りの準備をしましょう。

密飼いをさけ、適正な頭羽数での飼養管理をお願いします。畜舎周辺の雑草の刈り取りや、風通しの妨げになる資材等を片付けましょう。日差しが畜舎内へ直接あたらないよう、寒冷紗やよしずを設置することも効果的です。給水器もこまめに清掃し、家畜がいつでも新鮮な水を十分飲めるようにして下さい。屋根への散水や白色塗料塗布、石灰散布も畜舎内温度を下げるのに有効な方法です。また畜舎ファンの清掃（ほこり取り）も風量アップに繋がるだけでなく、電気代の節約にもなります。また酪農経営においては、バルククーラーのコンプレッサー清掃も冷却効率を高め、節電にも繋がりますのでぜひ取り組んで下さい。

高温多湿でサイレージの2次発酵がおきやすく腐敗も懸念されます。サイレージを取り出した後は、ビニルをすぐにかき、できるだけ空気を抜くようにして下さい。給与時に腐敗やカビを見つけたり、通常のサイレージ臭と違うニオイがした場合は廃棄するよう心がけて下さい。

牛では暑熱期、濃厚飼料と粗飼料給与のバランスが崩れ、ルーメンアシドーシスが発生しやすくなります。良質な粗飼料を十分食べ込ませたのを確認してから、濃厚飼料を給与するようにして下さい。

◆飼料作物

飼料作物ではトウモロコシの収穫時期になります。収穫適期を心がけ、サイレージ調製に当たっては、十分に踏圧を行い、ビニルをすきまなく掛け、嫌気発酵（できるだけ空気を入れない）するようにします。ソルゴーの2番草までの収穫を考える場合は再生草を考え8月中旬までに1番草を刈り取ります。収穫後は追肥を行って下さい。

上述した暑熱対策は、生産性の向上に繋がるだけでなく節電効果も高いため、ぜひ取り組んで下さい。

防疫対策の徹底も引き続きお願いします。

(須崎 哲也)

特用作物

◆茶

これからの作業は、来年の一番茶の母枝となる秋芽の充実と、葉層や芽数の確保を図るために大変重要となります。

1 最終摘採と干害防止

秋芽の生育期間を確保するため、最終摘採は、山間地域では7月中旬、その他の地域では8月上旬～中旬を目安に実施します。また、遅れ芽や徒長枝は、秋芽を切らないように注意して整枝します。

高温・乾燥は秋芽の生育を抑制します。晴天が続く場合は、7日おきに25～30^{ミリ}の散水が効果的です。

2 病害虫の防除

チャノミドリヒメヨコバイやチャノキイロアザミウマ、ハマキムシ類、炭疽病、もち病等の病害虫が発生しやすくなりますので、秋芽萌芽期と三葉期頃の2回、殺虫剤と殺菌剤を混用して防除します。

また、クワシロカイガラムシは、8月中旬～9月上旬に第三世代幼虫のふ化が予想されますので、発生状況を確認し、ふ化最盛期に防除します。

なお、防除を行う場合には、各地区の防除暦に従い適正に実施して下さい。

3 秋肥の施用と土づくり

秋肥は、中山間地域や寒害を受けやすい品種、幼木等では8月下旬までに、これ以外は9月上旬までに、土壌診断結果に基づき、地域の施肥基準に準じて施用します。

土壌が固く根量が少ない茶園では、9月上旬までに堆肥を1～2^ト施用し、深耕を行い、土づくりと発根促進による肥効率の向上に努めて下さい。

(佐藤邦彦)

◆しいたけ

しいたけの菌糸は、高温に弱く、ほだ木内の温度が35℃以上になると菌が死滅する恐れがあります。

夏場の高温によるほだ木の乾燥は、しいたけの発生量への影響や品質の低下につながるため、高温対策を中心としたほだ木管理が必要です。伏込地の笠木の補充や遮光ネットの設置により、直射日光による高温障害を防ぎ、伏込地周囲の除伐や下刈を行い、風通しを良くしましょう。特に西日が当たる場所では、笠木の張り出しを長くしましょう。

また、この時期は菌糸の成長が最も良い時期であると同時に、害菌も活動しやすい時期ですので、ほだ場をこまめに巡回し、害菌の発生が確認された場

合は、被害木を取り除いて隔離したり、被害がひどい場合には焼却処分しましょう。

このほか、収量アップのためには古ほだ木からの発生が重要です。天地返しやほだ回しを行い、しいたけ菌の活性化を図りましょう。

(小田 三保)

◆葉たばこ

今月は、夏期深耕や通常期買入に向けての出荷規格確認などが主な作業になります。また総掻き後、残幹処理が終了していない場合は、病害の耕種的防除のために早期に除去し、ほ地外へ持ち出しましょう。

1 夏期深耕は、スキ等により反転深耕を行い、立枯病など土壌中の病原菌密度低下や、土作りのために重要な作業となります。今年病害が出たほ地は特に念入りに行い、最低3回以上行う様に努めましょう。

2 貯蔵害虫発生防止のためセリコは通常期買入終了まで設置し、飛来予察に努めましょう。また、本葉系にもビニール梱包を行いましょう。梱包時は吸湿に注意し、口は養生テープなどで塞ぎましょう。

3 通常期買入に向けて出荷包の異物、過水分、色損葉の混合などの確認を行いましょう。

(松元 貴光)

内容の詳細について

8月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

なになに農業アラカルト

農業制度資金の概要をご紹介します

農業は本県の基幹産業でもありますが、その一方で、一般的に初期の投資から利益を回収するまでの期間が長く、また、気象条件等の影響を受けるリスクが大きいなど他の産業とは異なった性質を持っており、民間の金融商品にはよりがたいという面があります。

このような背景の中から、昭和30年代、国において農業制度資金が創設され、農業経営の改善等を図るための低利の資金融通が開始され、今日に至っています。

農業制度資金は大きく分けて、①JA等民間金融機関が自らの原資を活用し、県の利子補給を受けることで低利の資金を融通するものと、②日本政策金融公庫が国の予算に基づいた原資を低利で融通するものの二つがあります。①の代表的な資金が農業近代化資金であり、②の代表的な資金が農業経営基盤強化資金（スーパーL）や無利子の農業改良資金です。

簡単に資金の内容を紹介しますと、農業近代化資金は農業を営む方で借入対象資格等を満たす方が、規模拡大や設備投資等自己の経営改善を図るために、農業用施設を建てたり、農業用機械を購入するときなどにご利用いただけます。スーパーLは認定農業者を対象とするもので、農業近代化資金と同様に自己の経営改善を図るための資金ですが、農業近代化資金よりも借入限度額が大きく、償還期間が長く、農地等の購入が可能なのが特徴です。また、農業改良資金は新技術の導入など新たなチャレンジを支援する目的を持つ無利子の資金であることが特徴です。

お申込み窓口はJA等の金融機関か日本政策金融公庫になりますが、いずれの資金についても金融機関の審査に加え、借入対象資格や資金用途等細かな規定があります。また、今後5年間の経営計画を含む資金計画書等が必要で、お申込みをいただいてから融資決定までに一月半程度の時間を要します。また、資金の払出しは融資対象物の完成等を確認して行われることになるなど、通常の融資とは異なる面もありますので、まずはお近くの農業改良普及センターやJA等に相談してください。

なお、農業信用基金協会の機関保証の対象となる資金もあり、保証料等が必要ですが、担保や保証人等が不要となる場合もありますので、こちらもあわせてご相談ください。

(農業金融担当)

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
普通期水稲	いもち病(葉) ※※	並	<p>葉いもちは、箱施薬剤を施用したほ場であっても、薬剤の効果が切れると発病することがあるので注意します。また、穂いもちについては、出穂前に粒剤を施用するか、穂ばらみ後期及び穂揃期に粉剤または液剤による防除を徹底します。</p> <p>トビイロウンカは、6月末から7月始めにかけて飛来が確認されました。わずかな飛来量でもその後の増殖率が高く、坪枯れ等の被害が発生するため、ほ場での発生に注意します。</p> <p>セジロウンカも7月第1半旬に多飛来が確認され、生息数が多い状況です。特に飼料用稲(インディカ種)での増殖率が高く、一部で坪枯れが確認されていますので注意が必要です。</p>
	紋枯病	並	
	トビイロウンカ (秋ウンカ) ※※	やや多	
	セジロウンカ (夏ウンカ) ※※ コブノメイガ	やや多 やや少	
野菜類等	アブラムシ類	並	<p>アブラムシ類は、わずかな発生量でもウイルス病を媒介して、キュウリやピーマン等に大きな被害を及ぼすことがありますので、育苗期からの防除を徹底します。</p> <p>ハスモンヨトウは、ふ化直後は葉裏で集合して加害しますので、この時期の発見に努め若齢幼虫期に防除を行います。</p>
	ハスモンヨトウ等の チョウ目害虫	やや多	
カンキツ類	かいよう病	やや多	<p>台風による茎葉の損傷はかいよう病の発生を助長しますので、襲来前に予防散布します。</p> <p>梅雨時期の降水量が多く、黒点病の発生がやや多い状況です。感染源である枯枝の除去に努めるとともに、防除後の積算降水量が300mmになると次の防除が必要です。</p> <p>ミカンハダニは、今後の高温乾燥で生息密度が高まることが考えられます。高密度になると防除効果が低下しますので、発生初期段階(寄生葉率30%、1葉当たり虫数0.5~1頭)での防除がポイントです。</p>
	黒点病	やや多	
	ミカンハダニ	やや少	
	チャノキイロアザミウマ	並	
茶	炭疽病 ※ もち病	多 多	<p>両病害とも発生が多い状況です。秋芽の生育期に気温が高く、雨が多いと感染・まん延しやすいので、開葉期に防除を行います。防除適期が同じであるため同時に防除します。</p> <p>ハマキ類の防除適期は発蛾最盛期から7~10日後の幼虫孵化期ですので、多発園では幼虫の発生状況を確認して防除します。</p> <p>チャノキイロアザミウマはこの時期、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくく防除効果があがらないので、残効性の長い薬剤か1週間間隔での連続散布を行います。</p>
	チャノコクモンハマキ	並	
	チャハマキ	並	
	チャノソガ	やや多	
	カンザワハダニ	並	
	チャノキイロアザミウマ	並	
	チャノミドリヒメコバエ	並	
	クリシロカイガラムシ	並	
<p>1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。</p> <p>2) ※は注意報、※※は防除情報を発表していますので、詳しくはHPをご覧ください。</p> <p>病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、http://www.jpnpn.ne.jp/miyazakiです。</p>			